



会員のひろば

愛しき日々

石狩医師会 小谷 晃司
ふれあいクリニック

長女が小学校に上がったばかりの頃、ときどき夜中に目を覚まして「お父さん、ずっと死なないでね。私はお父さんとずっと一緒にいたいのだから。」と泣いた。抱き寄せて髪をなでながら「大丈夫、お父さんは死なないから。」などと無責任なことを言ってなだめていると、そういえば自分にも同じ年頃、人が死ぬ、特に家族が死ぬということが酷く恐ろしかった時期があったことが思い出された。

夕方友達とサッカーをしている最中に突然、「今もしこの瞬間お母さんが死んでいたらどうしよう。」という思いから逃れられなくなり、とうとう友達をぼっぽって走って家に帰った。しばらく走りつめて自分の家が見える頃には、もう声をあげて泣いていた。ただならぬ悲鳴を聞きつけて門のところまで出てきた母には「犬に追いかけられた。」と嘘をついた。

そのうち長女は泣かなくなった。あれは幼稚園から小学校に進み、それまで一分の隙もなく貼りつくように生きてきた親との間に突然に生じた距離への戸惑いだっただろう。習い事と学校行事の間隙を友達との予定で埋めていくような今時の多忙な小学校生活に馴染むにつれ、辛気臭い想いに耽っている暇もなくなったのだと思った。

そうして一年半ほどが経ったある日の朝、二年生になっていた長女が突然「お父さんはいま何歳？」と尋ねてきた。42歳だと答えると「えーと、100ひく42は58だから・・・良かったあ、お父さん、まだまだ生きられるねえー。」と言い置

いて笑顔で登校していった。なるほどあいつは最近暗算を覚えたのか、そして、まだ人の生死について引きずっていたのだな。

ミッション系の幼稚園に通っていた長女は自分の祖父が亡くなった時にも理科教材のザリガニが死んだ時にも、それは綺麗に手を合わせてみせた。その胸の内は知る由もなかったが、僕はその朝、長女の家族を愛する純粋な気持ちに触れると共に、彼女が7年10カ月の人生経験を7歳10カ月なりに咀嚼して、一生懸命自らの死生観を組み立てようとしているのを感じることができた。

その夜、ふと、長女が掛け算を覚えた時のことを想像してみた。「58かける365は21,170日だね。」父は60代半ば、祖父に至っては50代そこそこでありながらも脳卒中で他界している僕には、小学生のように100歳を人生の目標としてイメージすることは難しい。精一杯節制して70歳、思ってくれるお前の気持ちを汲んでも、まあ80歳までとさせてくれ。「それでも38かける365、まだ13,870日もあるよ。」そして、そこから毎朝ひとつずつ減っていくのだね。13,869日、13,868日、13,867日・・・始めのうちはまだ結構あるようだけれども、52歳あたりのある朝からは9,999日、9,998日、9,997日・・・4ケタに突入した途端、何だかいきなりに減っていく。年齢でいえば十分働き盛りのはずなのに、数え方ひとつでもうゴールが意識されてくる勢いだ。笑って生きようが泣いて過ごそうが今日という一日が終われば貴重な人生が確実にまた一日減っていく。今日という一日が抱きしめたいほど愛しく、跪きたくなるほど尊く感じられてくる。

お前の人生にもこれから楽しいこと、苦しいこと沢山あるだろう。勿論お前が楽しいと感じる日々が少しでも多いことを心から祈ってはいるけれど、どの一日だって同じように大切なのだということも知って欲しい。意にそぐわないことがあ

ったとしても、それだって生きていればこそ、人生というフルコースの中の一品として十分に味わって欲しいと思うのだ。知識は受身でも備わるけれど、智慧は意欲的に生きる者しか手にできないと信じる。長女よ、三年生になっても頑張れよ。

盆花

函館市医師会
国立病院機構函館病院

荻田 征美

盛夏も過ぎて爽やかな風を肌に受ける頃、盆踊りの櫓を囲りに歌やお囃子の賑わいで夏の終わりを惜しんだ光景を今や昔と思い浮かべる。先祖の供養を行うのもこの頃である。釧路には元々我が家の墓はないのであるが、私の弟だけはある年の盂蘭盆から、盆花と共に、町外れの海が見える小高い丘にある墓地の真新しい墓を訪れるようになった。

昭和36年春、まだ炭鉱も羽振りの良かった釧路で父は炭鉱病院に勤めていた。私たちは市の郊外にある炭鉱の職員住宅に住んでいた。向かいの家にその年の4月、小学校入学を迎える男の子がいた。この子のお父さんは総務課長で、会社の労務管理を長いことしていたせいか、私生活を犠牲にすることが多く、そのため世間並みの婚期を逸して晩婚であり、授かった子は夫婦にとって期待の一粒種であった。竜のごとく剛く育つようにと「竜也」と名付けられ、「たっちゃん」と愛称で呼ばれていた。その「たっちゃん」がようやくこの春に待望の小学一年生である。一人息子でもあり、両親にとっては目に入れても痛くない子であった。しかし、この子の住んでいる所は会社の幹部住宅であり周囲の一般職員の住宅とは離れており、おまけに親の年齢からして周りには同年齢の友達がいなかった。また親は家から遠くまで遊びに出すことは心配で許さなかった。

あんまり寂しそうにしているので、私の弟が声をかけた。「たっちゃん、お兄ちゃんと遊ぼうか。」「うん。」と言って人懐っこく寄って来た。し

父もまあ、ぼちぼち頑張るから。

時は今、ところ足許そのことに、打ち込む命、永久の御命（みのち）

（増上寺第八二世法主 椎尾辨匡）

ばらく私の家の周りで遊んで、小一時間ほどで帰って行った。家へ帰って一部始終をお母さんに報告した。それも舌足らずながら、息も切らずに、家事の仕事で動き回る母親の後をついて歩きながら、つぶさに報告をしていたというのだ。久しぶりに見た我が子の生き生きした様子に母親はすっかり喜んだ。そのことを報告がてら礼に来た。それ以来、たっちゃんは母の許しも出たものと、今度は毎日のように足繁く我が家へ通ってきた。

根っから子供好きの弟は自身も結構楽しんで相手になっていた。「お兄ちゃんに作って貰うから。」と言って、高価なプラモデルをお母さんにおねだりして弟の所へ持ち込み少しずつでき上がるのを辛抱強く見守っていた。完成したものを弟から手渡されると、それが飛行機であれ船であれ構わず手に翳して走り回った。たまに「お兄ちゃん、今お勉強だから、また後でね。」と言って聞かせることもあった。一度は納得したつもりでも子供はそう我慢のできるものではない。弟が机に向かっている部屋の窓の下に来てじっとしていた。カタコト音がするので、弟にはたっちゃんが来ているなど直ぐにわかった。「たっちゃん、家の中へ入って、勉強終わるの待っててくれるかい。」と言うと、「うん、待ってる。」と言って喜んで家の中に入ってきた。お兄ちゃんの邪魔をしてはいけないとばかりにかわいそうなほど神妙に静かに時間の経つのを待っていた。

ある時、たっちゃんのお母さんが「転んで膝をすりむいたのですけど、絆創膏位では血が止まらないんです。」と言って、たっちゃんを連れて来た。そこで父は消毒しガーゼを替えて軽く圧迫し、包帯を巻いて帰した。しかし翌朝も血で包帯が滲んでいると再度連れてきたので、父は病院へ連れて行き、血液像を染色してみ、驚いた。「ロイケミーだ！」と父は思わず声を出した。顕微鏡を通して見えた末梢血の血液像にはまるでハイル

マイヤーの図譜にあるような幼若な白血球が染まっていたというのだ。紛れもない急性白血病であった。新入学を目前にして、急遽、大学病院に紹介された。弟を始め私たちは、家族の心中を気遣いながらも、驚きのあまりただ呆然とするばかりであった。大学病院にたっちゃんが入院してからお母さんがずっと付き添い詰めであり、お父さんは会社のクラブ生活だったので家は空き家同然であった。父は出張で札幌へ出た折に大学病院に、たっちゃんを見舞ったが、日に日に悪くなっているとのことであった。

お盆も過ぎてそろそろ夏休みも終わる頃、夜、我が家ではまだモノクロのテレビでホームドラマを見ていた。すると茶の間の玄関寄りの襖だけががたがた揺れた。はじめのうちは誰も気にとめなかったが、あまり長く続くので、家族皆が気にし出した。そのうち「玄関、開いてやせんか。見て来いの。」と父が弟に言った。この時間に玄関が開いている訳がない。それにしても風もないのに襖が音を立てるほど揺れるのはおかしいと思いつつ、弟は見に行ったが、玄関の戸は締まり鍵もかかっていた。その他に寝室や応接室の窓も確認したが、やはり締まっていた。弟は何か背筋に走るものを感じて、少し気味が悪がった顔をして帰っ

てきた。「変だね。何処も開いていないよ。」と言って弟は元場所に座った。それから間もなく電話のベルが鳴った。市外電話だった。市外電話は会社の交換を通して来るので周りの者にも直ぐにそれとわかった。電話を受けた母は「わざわざどうも。気をしっかり持ってね。」と言って受話器を置いた。今し方たっちゃんが息を引き取ったということをお母さんが悲しみの中から知らせてくれたのだった。それを聞いてバネ仕掛けのように弟が立ち上がった。「たっちゃんが会いに来てくれたんだ!」と叫びながら玄関の方に走って行き、玄関を開いて、向かいの家の方をじっと見ていた。遠くに虫の音が微かに聞こえるのみの深閑とした遅い夏の闇の中に久しく人の気配のない家が辛うじて透かして見えるだけであった。弟の後ろ姿を見て、エミリー・ブロンテ作「嵐が丘」の中でキャサリンの霊を招き入れようとするヒースクリフを思い浮かべた。

数日後、久しくひと気の無かった向かいの家で葬儀の準備が行われた。この時期、いつもの季節ならば秋の気配の感じられる釧路の町であるが、この日に限って珍しく日差しの強い熱い日であった。花に飾られた出棺の車を見えなくなるまで弟は我が家の玄関前で見送っていた。

道医報半年分の会員の計報

空 知 医 師 会 徳 倉 昂

平成17年後半7月～12月までの道医報の計報をまとめてみた。退会した方は含まれないのでその分少ない。60歳台までの6名、それなりの訳はあったのだろうけれど、あまりにも若すぎる。71～80歳までに74歳までの方が5名。また、81～90歳までで85歳以下が16名もいる。いずれももっと減らしたい。私は8年前に退職したが、その時に次のようなことを書いた。

今回の退職について思ったままを書きました。人生においていろいろな意味を持つ退職。それは

道医報の計報（平成17年7月～12月）

月	歳	～60	61～70	71～80	81～90	91～	
7		—	—	78	82 82 84	—	4
8	51 51(♀)	69 70	—	—	—	—	4
9	57	65	80	81 83 84	90		7
10	54 57	—	73 74 77 79 79 80	81 81 83 84 87	—		13
11	—	70	72 74 76 77(♀)77 77	81 84	90		10
12	54	—	71 77 79	82 82 83 85 86 89	91 95		12
		6	4	17	19	4	50

誰にとっても必ずやってきます。職業柄とはいえ、私の場合は20年近くも他の人々よりも長く働かせていただいたことは望外の幸といえます。しかも、その翌日から請われて次の仕事が続いているということは、それに応ずると否とに関らず、有難いことです。仕事を離れて自分の時間を自由

に過ごす人生ですが、人生の終末を迎えた老人達に安らかな老後を過ごして貰うための仕事につくのは更にやりがいのある人生だと思います。いずれにしろ限りある人生を有効に活用したいものです。しかしそれには自分が健康で、それらのことに十分に耐えるだけの体力がなければできません。自分の中にいろいろな自分がいます。酒好き、タバコ好き、運動嫌い、食い気盛等々の悪い生活習慣好きの自分と十分に話し合っ、悪い生

活習慣はその許容範囲内におさめて、健康の維持と増進に努めて欲しいと思います。年金は絶対に貰わないと損です。長く長く貰って人生を楽しむべきです。健康の維持は健康である時から考える必要があります。先生によっては表を見て、月と年齢によってその死因が何なのかわかる方もおられると思います。一度きりの人生大切にしたいものです。

専門部から

日医認定産業医制度研修会開催一覧 (道内開催分のみ)

◇産業保健部◇

主催者名	開催日時	開催場所	主なテーマおよび講師	基礎・生涯研修単位数			連絡先	備考
				前期更新	実地	後期専門		
旭川市医師会	平成18年3月16日(木) 18:30~20:30	旭川グランドホテル (旭川市)	・騒音の影響と評価 北海道産業保健推進センター 特別相談員 山村 晃太郎 ・法規の解説 旭川労働基準監督署長 石川 俊英	1		2	旭川市医師会 0166-23-5728	
日本産業衛生学会北海道分会	平成18年3月18日(土) 13:30~17:00	北大学術交流会館大講堂 (札幌市)	・過重労働対策について 北海道労働保健管理協会健康管理部長 川崎 能道 ・労働現場における感染症対策 ～鳥(新型)インフルエンザへの対応に学ぶ～ 小樽市保健所主幹 江原 朗 ・小規模事業所における産業保健スタッフの役割について 帯広松下電工株式会社健康管理室 吉岡 妙子 五輪橋内科病院・札幌市産業医協議会副会長 中野 洋一郎			3	日本産業衛生学会 北海道分会事務局 011-706-5068 (道医HP掲載)	定員:200名 受講料 学会員 500円 非学会員 1,000円
北海道産業保健推進センター	平成18年5月18日(木) 18:00~20:00	北海道産業保健推進センター (札幌市)	・産業医スタートアップ研修 「産業保健活動と産業医について」 北海道労働保健管理協会 参与・医療本部長 清田 典宏			2	北海道産業保健推進センター 011-726-7701	定員:50名
北海道産業保健推進センター	平成18年5月31日(木) 18:00~20:00	北海道産業保健推進センター (札幌市)	・労災医学研修(過重労働対策) 「改正労働安全衛生法の概要について」 陸運労災防止協会安全管理士 大島 健一	2		2	北海道産業保健推進センター 011-726-7701	定員:50名

* 研修単位数: 上段は基礎研修、下段は生涯研修

* 主催者が太字のものは、本号より新たに掲載されたもので日医に申請中です